

【研究発表③】

佟 欣妍「王安石の老子注について」

王安石の『老子注』はその生涯をかけた精力的な著作であり、私たちが今日北宋の新学を研究する上で、重要なテキストでもある。しかし、それが散逸してしまったため、長い間学界から重視されてこなかった。本文は既存の資料を整理した上で、新しい校閲方式を提案し、王安石の老子思想への改造について、そして、思想史上の重要な問題について再解釈しようとするものである。王安石の『老子注』の輯本のうち、羅家湘本は蒙文通、嚴靈峰、容肇祖の研究成果を取り込み、現存する最も優れた輯本であるが、中にはまだ誤謬が存在する。例えば、第4章「挫其鋭」に対して「鋭者、火之形」と注されているが、王安石の息子である王雱の『老子訓伝』を参照すれば、「火之形」が「尖之形」の間違いであることがわかる。王雱は自らの注において、その父の説を大量に踏襲し、既存のテキストを校正する上で重要な資料である。王安石は生涯、変法運動に尽力し、改革と有為を提唱してきたが、老子はちょうど「無為」を主張しており、このような思想の食い違いが本文の切り口となる。本文は、王安石がどのように『周易』から思想内容を借り、「乾坤」の道でもって老子の「有無」の関係を再解釈したか、そして、王弼以来の「以無為本」の解釈方針を捻じ曲げ、儒家の有為を老子解釈の中に接木したかを系統的に示そうとするものである。また、これまでの研究では、王安石の思想史における重要な貢献の一つは、「道德性命」を提唱したことであり、「世は之を孟軻と上下すと謂ふ」という位置付けに注目してきた。しかし、王安石がどのように「道德性命」を提起したか、およびその説の実際的な内容については、まだ研究が不足していると考えられる。本文は、王安石の老子注釈を通じて、王安石がどのように老子と孟子を並べ、聖人の道の表裏両面としているかを明らかにする。そして、王安石を「孟軻と上下」たらしめた「道德性命」の説は、儒家の伝統観念に限らず、彼の改造により儒家化した老子の説と結びつけて理解すべきことを提案したい。